

# 冷泉為満の『伊勢物語抄』

—— その注釈方法と家意識 ——

高 木 輝 代

はじめに

本書は、片桐洋一先生御所蔵の「伊勢物語」の注釈書、上十二冊、縦二八・七種、横二〇種、一面十行書きの楮紙袋綴じの冊子本である。外題はなく、内題には「伊勢物語抄」とある。

上巻は「抑伊勢物語根源」で始まる定家本の識語の後、初段から第六十段まで、下巻は第六十一段から第二百二十五段までの注釈がなされ、下巻の奥には、

御本云

右抄上下者依尾張侍從忠吉朝臣

御懇望家秘説等記之令進献

不可有他見者也

慶長第九天極月下三日

右近中将藤原為満

とある。「御本云」とあることから、為満自筆本からの直接の転写本であることが知られるが、書写年代も、その為満筆本に近い時期であろうと思われる。

「尾張侍從忠吉朝臣」は、尾張国清須城主、松平忠吉（一五八〇—一六〇七）のことであり、為満にこの書を「御懇望」した由が窺える。一方、為満は、慶長十九年に駿府で徳川家康に古今伝授を行い、また「愚問賢注」の講義である「和歌講談」を著したことも知られた人物である。史上、為満と忠吉の關係は確認し得ないものの、「大日本史料」の慶長九年三月十五日条には、為満が山科言緒らと尾張の熱田宮で法楽和歌会を催していることが見え、同じ年のはじ

めに為満が尾張へ出向いていたことは興味深いものであるとともに、鎌倉時代から武家統領との交流を大事にしてきた冷泉家であつて、忠吉と家康との関係なども合わせ考えると、この奥書の言うところの信憑性は高いと思われる。

本稿では、この「伊勢物語抄」の注釈方法と、そこから読み取れる、この時期における冷泉家の「伊勢物語」研究の実相に迫つてみたい。

## 一、注釈方法

### (一)「愚見抄」と「惟清抄」との関係

「伊勢物語抄」は、「伊勢物語」の本文すべてを挙げた上、その注釈を加える形をとっている。そこでまず、どのような方法で注釈が加えられたのかを見ていくことにする。

この注釈の在り方を考える上で、最も顕著な特徴として、「愚見抄」と「惟清抄」との関係が挙げられよう。これを、第四段を例に確かめていくことにする。

「伊勢物語抄」は、「にしのたいにすむ人有けり」<sup>(注)</sup>の注で、

南の寝殿にあひならべて西東にある殿をば西のたい東のたいなと云也。此西のたいにすむ人は、二条の後也。染殿太后とはい

とこにてましますが故に、西のたいにすみ給へるなるべし。二

条の後は貞観八年女御入内あり。是はそれよりさきのことなるべし。

としている。しかし、これは「愚見抄」の、

南の寝殿にあひならべてにしひんがしにある殿をば西の対・東の対などいふなり。此西の対にすむ人は、二条の后を申也。染殿の太后とはいとこにてましますが故に、西の対にすみ給へるなるべし。二条の後は貞観八年女御入内あり。これはそれより前の事也。<sup>(注)</sup>

という記述とほぼ同じである。同様に、先の「むかし、ひんがしの五条に、おほきさいの宮おはしましける」の注も「愚見抄」と同じであつて、「伊勢物語抄」が、「愚見抄」からのそのままの引用とも言えるような形でまとめられていることが知られよう。しかし、「伊勢物語抄」の、「それを、ほいにはあらで心ざしふか、りける人ゆきとぶらひけるを」の注には、

ほいにはあらでとは、あらはにはあらでと云心也。ほに出るとは、あらはる、ことを云。ほいにはあらでは、忍てと云義也。

又、本意にはあらでと云り。其故は思のほかなる心也。かねては是ほどまでは思はざりしが、深切になりたるを云と云々。此人は則中将をいへり。

とある。中程にある「又、本意にはあらでと云り」までの注は、

アラハニハアラデト云心也。ホニ出ルトハ、アラハル、事ヲ云。  
ホイニハアラデハ、忍テト云義也。又、本意ニハアラデト云リ。

其モ義ハ消スレドモ、只アラハニアラデト云方マサレルニヤ。

と注する「惟清抄」の傍線部と一致している。この部分を「愚見抄」では、

ほいには、本意なり。ほいにはあらでは、思のほかなること、ろ也。かねてはこれほどまではおもはざりしが、深切になりたるをほいにはあらで心ざしふか、りしといへり。此人はすなはち中將をいへり。

としており、「伊勢物語抄」の残り部分である「思いのほかなること、ろ也」から後と一致し、更に、「愚見抄」の注を略して「云々」としていることが知られるのである。

このように、そのまますべてを引用するのではなく、時に略し、要約したりするのは、他の部分にも見られる現象である。また、「伊勢物語抄」が「ほい」を「あらは」と解する「惟清抄」を採り、「本意」と解するところになると、より詳しく注されている「愚見抄」を採っていることがわかるのである。

ところで、前掲した「惟清抄」の注釈は、「闕疑抄」にも全く同じ言辭が見られる。「闕疑抄」の成立年代とその普及、及び、為満と幽斎の交流などを考えると、「闕疑抄」からの引用とも考え得る

が、例えば第二十一段の「いで、いなば心かるしといひやせん世のありさまを人はしらねば」の注において、「伊勢物語抄」は、

此を出ていなば、我を心かるきものと人のいひやせむ。得堪忍せぬいはれのあるを人のしらざればと云り。

と注し、「惟清抄」とは完全な一致を見せているが、一方、「闕疑抄」では、

夫婦の間の恨有て、堪忍しがたき事のあるをば、世の人はしらで我心かるき物といひやなさんといへるさま也。いさ、かの事につけては、女の堪忍のなく、心かるきといはん首尾也。

としており、「伊勢物語抄」や「惟清抄」との類似が見られるものの、直接関係とはなし得ないものがある。というわけで、「伊勢物語抄」は「闕疑抄」ではなく、「惟清抄」から引用していることは、この場合、明らかだと思ふのである。同じようなことは他にも見られ、「闕疑抄」と「惟清抄」の注がほとんど同じ言辭であっても、その若干の相違部分においては、「惟清抄」と一致したり近似していたりして、「伊勢物語抄」が「惟清抄」から引用していると考えられるのである。

以上のように、「伊勢物語抄」が、「愚見抄」と「惟清抄」を利用していることが明らかになったのであるが、その利用の方法は、「愚見抄」「惟清抄」の両説が同じ見解を見せる場合は、どちらか一

方を引くか、両説の必要な箇所のみを引用するのであるが、両者が異なる見解である場合は、両説を組み合わせたか、「又の説に」などとして紹介したりするのである。「伊勢物語抄」は、注釈内容に合わせて、臨機応変に「愚見抄」「惟清抄」を利用していると言えるであらう。

そのことは、第四段における「あばらなるいたじきに、月のかたぶくまで、ふせりて、こそを思ひいで、よめる」の注において、より明確となる。

「伊勢物語抄」に、

あばらなるはあれたるを云也。西の対の人、ほかにかくれて、人すまぬ所なれば、業平の心にあれたるやうにおぼゆるなるべし。

とある部分、「愚見抄」では、

あばらなるは、あれたるをいふ也。西の対の人、外にかくれて、人すまぬ所なれば、あれたるといふなり。

とし、「惟清抄」では、

ヲチアレタルヤウニモアル歟。又アナガチサハナクトモ、人ノスマズ主人ノナキ所ハ、アレネドモアレタルヤウナルモノ也。業平ノ心ニ其人ノナケレバ、荒タルヤウニオボユルナルベシ。

としているのであって、それぞれの傍線部と一致している。つまり、

「伊勢物語抄」は、「あばらなる」の意を「あれたる」と解する「愚見抄」と、業平の心までが「あれたる」と解する「惟清抄」をつなぎ合わせ、ひとつの文章としてまとめているのである。

このように、「伊勢物語抄」が、「愚見抄」と「惟清抄」に拠っていることは明らかであるが、注釈内容は、そのどちらか一方をより尊重しているということではないようである。例えば第十三段において、「惟清抄」の第十三段に見られる注釈をそのまますべて取り入れているのに対して、「愚見抄」のそれは一切示さず、まるで「惟清抄」が中心であるかのようにだが、逆に、第一百七段の場合は「愚見抄」の注のみで構成されているので、そうとは言い切れない。だが、上巻は「惟清抄」を、下巻は「愚見抄」をより多く引用しているという傾向があることを指摘しておきたい。

ところで、注意すべきはこのように「愚見抄」「惟清抄」の説をそのまま引いておきながら、その出典を記さず、あたかも自らの説であるかのように「伊勢物語抄」が注釈していることである。いわば、「愚見抄」「惟清抄」に全面的に依拠しながら家説を述べているという感になっていることである。これは最も問題にすべき特徴であるので、後に改めて述べたいと思う。

(二) その他の注釈方法

冷泉為満の「伊勢物語抄」が、この時期最も大きな影響力を持っていた「愚見抄」「惟清抄」の説を集成したものであったことは今まで見てきた通りであるが、その他の注釈書とは関係がないのかわか、あるいは、冷泉家伝来の家説が見られるかどうかを、次に検討していくことにする。

前述したように、「伊勢物語抄」の注釈のほとんどが、「愚見抄」「惟清抄」と一致を見せるが、稀にはこの両書に見られない説も存在する。第四十段「とゞむるいきおひなし」の注で「伊勢物語抄」は、

おひやらんとするを、おしてとゞめんともせざる也。ふかくうらむる心もなきを、ほめてかけり。此心殊勝云々。

と注している。この前半は、

追ヤラントスルヲ、ヲシテトゞメントモセザル也。

とする「惟清抄」と合致するが、後半は、「惟清抄」にはもちろん、「愚見抄」にも見られないコメントである。しかし、他注釈書に目を向けると、

(前略)をひやらんとするを、とゞむるいきおひなく、ふかくうらむる心もなきを、ほめてけり。此心殊勝也。

と注する「肖聞抄」との一致が傍線部によって知られるのである。

ここでは「伊勢物語抄」が「肖聞抄」の必要な箇所のみを引用し、「也」と言い切るのを避けて「云々」としている。続く「女もいやしければ、すまふちからなし。さるあひだに」の注でも、

上の詞に下すしからぬと云て、爰にいやしといふは、年のわかきを云。朝廷莫如爵、郷党莫如齒の心也。

としており、「年のわかきを云」以下は、「惟清抄」とも一致しているが、少なくとも前半は、

上詞は下すしからぬとあり。爰にいやしといふは、年のわかき事也云々。朝廷莫如爵、郷党莫如齒ともいへり。又、儀前に同じ。

と注する「肖聞抄」に拠っているとみてよいと思う。「愚見抄」ではこの箇所注釈はなされていない。又、次の「思ひはいやまさりにまさる」の注は、「愚見抄」「惟清抄」ともになく、「伊勢物語抄」が「業平の思ひ也」とするのは、「肖聞抄」とのみ一致する。

このようにして、「肖聞抄」との関係も認められるのではあるが、「愚見抄」「惟清抄」のように頻繁に用いられるのではなく、全体を通じてみても多くはない。「肖聞抄」は「愚見抄」「惟清抄」を補足する形で用いられているのである。今、例に挙げた第四十段の場合でも、「愚見抄」では全く触れられていない注釈箇所であり、「惟清

抄」にも詳しい注があるわけではなく、そうした場合に「肖聞抄」を引いていると言える。よつて、注釈の内容が、「愚見抄」「惟清抄」に同じである場合は、「肖聞抄」は引用されないのである。あくまでも注釈の根幹をなすものは「愚見抄」「惟清抄」なのであつて、「肖聞抄」はそれらを補うに過ぎない。

しかし、その引用のされ方は、やはり「愚見抄」「惟清抄」の場合と同じく、それが「肖聞抄」であることは明示されない。これは、松平忠吉が「伊勢物語」に対する知識が浅く、今みてきたごとく、たとえ諸注をほぼ一字一句違えず集成したものであつても、全くそうとは気付かず、為満自身による注釈であると考えていたことを示すものと言つてよいのではないか。

では次に、為満自身の見解を見ていくことにする。為満自身の言辭と思われるものは、今まで述べてきたように、諸注を省略したり、要約したりする際に多く見られるが、例は少ないながらも、「愚見抄」「惟清抄」「肖聞抄」も含めて、他の注釈書には見出せない解釈を示している場合がある。これを為満自身の解釈であると解すると、次のような特徴が見受けられる。

第一に、漢字を宛てて解釈しようとするものが挙げられる。第二十一段「思かひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすまひし」の注の中で、「夫婦同居するをすむと云。住字歟」とする他、第五

十八段「こともなき女どもの、あなかなりければ」の注では、「こともなきは無事なる心也」としたり、第六十五段「この女のいとこのみやす所、女をばまかでさせて(中略)くらにこもりてなく」の注では、「まかでさせは罷退出さする也」としている。これらはその箇所の注釈の中において、他注釈書が触れていないものである。例えば、はじめに挙げた「思かひなき」歌の注では、「惟清抄」と「肖聞抄」を引いて、歌全体の解釈を述べているが、その両書には、「すむ」という一つの語に対する解釈はなされていない。他の例も同様に、全体というよりは、その中にある、ある一つの語への解釈に努めようとしているのである。

第二に、清濁を示すものが挙げられる。第九段「京にその人の御もとにとて、ふみかきてつく」の注では、「惟清抄」を引用した後、「晝てつく、くの字清べし」とある。同じものとしては、第十八段「おとこ、ちかう有けり」の注で、「愚見抄」の言う、「女の男にをそれずはしぢかなるを云」と解する際は、「ちかうのちの字濁べし」とし、続けて「然ども、近と云字なれば清べき歟」としている。

他には、句の切り方を示すものが挙げられる。先程挙げた第二十一段「思かひなき」歌の注の中に、「思かひなき世なりけりとよみ切べし」と注していることが知られる。また、第二十七段「むかし、男(中略)ぬきすをうちやりて、たらひのかげにみえけるを、みづ

から」の注では、「うちやりては取のけてなり」とするように、簡単な語釈のようなものも見られる。更に、第七十一段「ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大官人のみまほしさに」歌の注では、「ちはやぶるとは、神といはん枕ことば也」というようなきわめて初歩的な注を加えているのである。

概して、全体としての解釈を述べているのではなく、全体を理解するための、程度の低い説明であると言えよう。「愚見抄」「惟清抄」「肖聞抄」という注釈書を集成しつつ、その上さらに、語の理解について初歩的な言辞を自ら付加していることは、やはり、忠吉の知識が浅いことを前提にしているとは言えまいか。

## 二、冷泉家としての意識

これまで見てきたように、「伊勢物語抄」は「伊勢物語」の知識の浅い忠吉に対して、為満が「愚見抄」「惟清抄」を中心に、「肖聞抄」をも加えながら集成したものであると考えられる。しかし問題は、はじめに挙げた奥書によれば、為満は「家秘説等」を記して忠吉に「進献」していたのであり、本書を冷泉家の「秘説」として見なければならぬことである。

そこで、例は少ないのであるが、為満が家を意識して注釈している箇所注目してみたい。

第一段「うみかうぶりして」の注では、「或説」として「うみかうぶり」を「元服の事」とする「惟清抄」を引いた後、

当流に不用。当流に用るところ、叙爵の事也。日本紀に初位とかきてうみかうぶりとよむなり。日本紀は日本の書の始めなるによりて当流に用なり。

としている。「元服」ではなく、「当流」では「叙爵」と解するのだという内容である。しかし、「愚見抄」を見ると、

うみは初也。かうぶりは爵也。五位のかうぶりといふは、叙爵をいへば、業平中将はじめて叙爵したる事をいへり。(中略)

こ、には叙爵をうみかうぶるとはいふべし。日本紀ニッポンキにも、初位とかきて、うみかうぶりとよめる也。

とあり、「当流」と言つて、「愚見抄」の「叙爵」説を引用しているのである。同じ例として、第九十六段「かの男は、あまのさかてをうちてなん、のろひをるなる」の注で、はじめに「海人」がさかさまになつて海底へ入るので、息ができず苦しいことにたとえて、業平も「あまのさかて」をうつように苦しいのだと解する「惟清抄」を引いている。その後、「といふ説あり。当流に用るところ」として、「愚見抄」が「あまのさかてをうつ」のは、「人を呪詛する事」

であると、「日本紀」にある、「地神第四代彦火々出見尊と申神とこのかみ火闌降命と申」二神の説話を書き記しているのを「伊勢物

語抄」もそっくりそのまま長々と引いているのである。他には、第

百五段」といへりければ、いとなめしと思けれど、心ざしは、いやまさりけり」の注で、「白露はけなげな、んといへるは、あまり存外には思へども、志はいやましになるとみるべき」だとする「惟清抄」を挙げた後、「と云説あり。家説には」として、「無礼とかきてよめり。けなげな、んとよめる哥を無礼なるといへり。なざけなき心なるべし」とするのは「愚見抄」と全く一致し、これらのことからは、「惟清抄」を否定し、「家説」として「愚見抄」を用いていることがわかる。又、第二十三段「風ふけばおきつしら浪たつ（た）山よはにや君がひとりこゆらん」の歌の注で、「白浪は盗人の事」であると解する「惟清抄」を引いた後、「当流に用ところ」は、「たつた山といはんとて風ふけば沖つしら波とつゝけたり」と注している。これは、「惟清抄」が「頭注密勸三注スルニ」として挙げた注と類似してはいるものの、「愚見抄」が「定家卿は」として挙げた注とは完全に一致しており、この場合も、「当流」説は「愚見抄」に拠っているとみてよい。

このように、「当流」あるいは「家説」として明示しているのは、「愚見抄」そのものなのである。そして、「伊勢物語抄」が章段を「愚見抄」と同じく、第二十二段の途中で第二十三段として扱っていることから見ても、<sup>(注)</sup>「愚見抄」を基本にしていることが確認され

るのである。

次に、「当流」などとして「愚見抄」を引く際、必ず「惟清抄」説が否定されていることに注意したい。冷泉家は、為秀のころから二条家との対立が激しくなり、事あるごとに二条家批判をくり広げる。「伊勢物語抄」においても同じように「二条家説」を批判する姿勢が見えるが、その説の内容は紛れもなく「惟清抄」なのである。第七段「むかし、おとこ有けり。京にありわびて、あづまにいけるに（中略）浪のいとしろくたつをみて」の注では、「あづま」に行くことに対して、

京にて人を恋わびて、心をもなぐさむるやとて、友だちをさそひて、東へ行、奥州の方まで行ける也。

と注している。これは「愚見抄」に同じである。そして、「伊勢物語抄」は続けて、

二条家説には、業平の左遷の事、沙汰ある事なれば、其時の事かとおほつかなうかけり。

と注している。「惟清抄」は、

業平ノ左遷ノ事沙汰アル事ナレバ、其時歎。又、タゞモ行ケル歎。

と注しており、「左遷」であるか、「タゞモ行」ったのかはつきりしていない。このことを、「伊勢物語抄」では「おほつかなうかけり」



と批判し、「惟清抄」を「二条家説」として捉えていることが知られるのである。他には、第十八段「紅に、ほふがうへのしらぎくはおりける人のそでかともみゆ」の歌の注で、

紅に、ほふ白菊は、おりける人の袖もかくぞあるらんとおもひやると、いさ、かも動ぜぬやうによみてやる也。

として「惟清抄」を引いて、

是は二条家の説也。当流に用るところ、うつろへるが上に、又白くみゆるは、手折ける人の袖の色をのこせるかとよめる也。

と注し、先に挙げた「惟清抄」を「二条家の説」として、「当流に用るところ」での説は、やはり「愚見抄」との一致を見せている。

「惟清抄」は周知のごとく三条西実隆の講釈を清原宣賢が聞書したものである。三条西家の注釈である「惟清抄」に対して「二条家説」としているのであり、為満が意識する「二条家」として扱うのは何故かを考えねばならないであろう。

為氏を祖とする二条家は、為遠・為重などを最後に断絶している。しかし、淨弁・頼阿に代表される地下の歌僧、また連歌師たちによって、二条家は二条派となり、脈々と受け継がれ、また、二条家の説は、宗祇や三条西家を通して宮廷にまで入り込んでいた。一方、冷泉家は堂上での歌壇活動に力を注ぎ、了俊・正徹など、冷泉派とも呼ぶべき存在もあったが、二条派のごとく、広く国民に滲透するこ

とはなかった。だが、冷泉家正統の為満は、正統な二条家の説ではなく、「惟清抄」のように三条西家の説であったとしても、「二条家説」として理解していたのであり、それらと対立する姿勢を見せることで、冷泉家として正統性を誇示していたと思われるのである。

しかし、その「当流」の説の内容は、今見てきたように、「愚見抄」そのものである。兼良は、冷泉家伝来である定家自筆の嘉祿本「古今集」を閲覧することができた人物であるので、冷泉家とは近しいが、正統な冷泉家流であったとは言えない。その兼良の「愚見抄」を「当流」とするのは、当時、「愚見抄」が最も流行していたためとも考えられるが、為満より三代前である為広の時には既に兼良自筆本の「愚見抄」が存在している事実(付)を考えると、為広の頃から冷泉家では、「愚見抄」を冷泉家の説として扱っていたのではないだろうか。このことは、冷泉家における「伊勢物語」研究が、それ以上に発展し得なかつたという事実と深くかかわっているように思われる。つまり、この頃冷泉家では、「愚見抄」そのものを「当流」として扱わざるを得ない状態にあったと考えられるのである。

#### むすび

以上、今まで述べてきたことを整理したい。

まず、「伊勢物語抄」が、当時一般的に広く用いられていた「愚見抄」と「惟清抄」を中心に、「首聞抄」で補いながら集成したものであることである。諸注集成の流行していた時期とは言え、それらを冷泉為満が自説であるかのごとく述べ、中には「当流」「家説」と明示していても、実際は「愚見抄」そのものであるということも多く、しかも、その場合、「惟清抄」に対して「二条家説」と明示するなどして、必ず批判的立場をとっているのである。このように諸注集成とも言える内容を、出典は明かさぬままに冷泉家説として忠吉に「進献」した為満は、そうすることによって、冷泉家としての権威を示したのである。

もつとも、この「伊勢物語抄」が当時における冷泉家の「伊勢物語」注釈の実態のすべてを語っているとは言えない。「伊勢物語抄」の注釈がほとんど他注釈そのままの引用であるのに気付かない、知識が浅く、若い忠吉であったからこそ、このような注釈であっても、冷泉家の「伊勢物語」の注釈として通用し得たとも考えられる。より高度な知識人に対する注釈書であったならば、為満自身の見解や、為相にはじまる冷泉家の秘説ともいべき注釈がなされていたかもしれないのである。そうではあるものの、冷泉家に入っていた「愚見抄」を「当流」として明示し、基本としながら、他注釈書を整理し、体系化してまとめた「伊勢物語抄」を、冷泉家説として提示し

ていた事実を忘れてはならないと思うのである。

(注)

1、本書は第二十二段「いにしへゆくさきのことゝもなどいひて」の注で、

当流一段にきり給へり。二条家にはよみつゝべきなりと云々。それによりて、二条家には一段すくなし。

というように「愚見抄」に従つて、ここからを第二十三段として見ており、よつて上巻は第六十一段までとなるが、混乱を避けるため、以下、現在通行の定家本の章段数と合わせて述べていくことにする。注7参照。

2、為満の歌壇的活動については、井上宗雄氏「中世歌壇史の研究 室町後期」に詳しい。

3、本書にはほとんどすべての漢字にふり仮名が施されているが省略する。また、所によつて濁点が付されているが、便宜上私に改め、句読点も付し、明らかに脱字と思われるものには括弧で補った。

4、以下、「伊勢物語」の注釈書は、片桐洋一先生「伊勢物語の研究〔資料篇〕」に拠る。猶、「惟清抄」については、「天理図書館善本叢書 和書之部 第四十三卷 和歌物語古註集」

を用いたが、翻刻するにあたり、私に濁点及び句読点を付した。

5、天正十四年四月十二日に、幽齋に為満が定家筆三代集などを見せている。前掲注2の書に詳しい。

6、注1参照

7、冷泉家時雨亭叢書41「伊勢物語・伊勢物語愚見抄」の解題

(片桐洋一先生執筆)に詳しい。

(付記)平成十年一月十日から二月十五日まで開催された名古屋市博物館における「冷泉家の至宝展」に特別出陳された名古屋市の某家所蔵の「伊勢物語抄」は該本と同じものであったが、片桐洋一先生によれば、その書写年代は江戸時代中後期まで下るとのことである。

(たかぎ てるよ／本学大学院生)